



TITLE:

雜纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雜纂. 日本外科宝函 1940, 17(3): 723-744

ISSUE DATE:

1940-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205176>

RIGHT:

テオドール・ビルロートの書簡集から

ト 庵 老 生

97. 在ウキン, ブラーム教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (ウキンより 58歳)]

『……凡てが夢だよ！ 夢だよ！ 然し何事もせずに仕事のないと云ふ事は生活とは云へない。……だが病氣だから仕方がないにしても拙者の家族、拙者の友人、また拙者の門弟が心を盡して慰めてくれるのは喜ばしいよ！ …… どうも夜間睡眠がよく出来ない半醒半睡の状態には困つてゐる。目下3時間か4時間の睡眠で満足してゐるより仕方がない。……他人の同情に對しては有難くは思ふがさりとて此老人が之に對して何を以て酬んかなだ！ 其感謝の意を表する爲めに何か新しい學問的の事でも創案するかなア？ 然しそれは此老人には最早だめだ。……』

樂岡子！ B. は愈々心身共に老ひて來た！ 當時カルモチンかアダリンでもあればよかつたと思ふ！ 不眠症……其の醫學上の理屈は云はないが多くの老人の悩みであるらしい。

98. 在バーゼル, ゾチン教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (サンギルケンより 58歳)]

『……サンギルケンへやつて來た。……一は靜養のため一は家族のためだ。……そしてピアノだ、ピアノだ。近頃拙者は多少輕快するだらうと云ふ希望を有する様になつた。だが拙者の肺、拙者の心臓、拙者の神経、拙者の腎と肝等々、凡てが古い使ひ古しの機關たるは争ふべからずだ！ 注意が必要だ。…… Oertel の治療法は拙者には急激過ぎて應用出来ないから漸次減食法をやつてゐるより仕方がない。然し拙者の脂肪心臓に對して急激な減食法をやれば最後と云ふものだ。昔時君と一緒にオステンテでフルグンデル酒や シャンパンを痛飲した事を思ひ出すぞ。……』

99. 在ウキン, ゲルズニ教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (サンギルケンより 58歳)]

『……6月8日の計量によると拙者の體量が101 kg あつたが6月23日の計量では87½ kg に減じた。……即ち16日間で體量12 kg 減つた事になつた。だから此療法を續けて85 kg 乃至90 kg の間まで引下げられると考へてゐるのだ。レンバハ畫伯の畫いたビスマークの畫像と比較するとビスマークと拙者の體重の増減は全く反對だ。……』

樂岡子！醫者の病人ほど厄介なものはない。外科の大家 B. が其靜養地にあつて毎日毎日體量計とにらみ合ひをしてゐた姿が想像せらるゝ。肥大なる樂岡子よ！御用心、御用心。

100. 在伯林大學，グルト教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (ウキンより 58歳)]

註。此時ランゲンベック死す。行年77歳。

『……ランゲンベック先生の葬式は伯林で施行せられるとの報知がありましたが拙者は丁度昨日靜養地からウキンへ歸つたばかりでありまして 雜務山積と云ふ始末でありますし又何分にも家族のもの共は拙者の病氣に就いて心配をしてゐますから、最初は是非共先生の葬儀に伯林まで出掛けたいとは考へてゐましたが、とても此際長途の旅行は出来ないから失禮をする心算であります。……それから今後 Archiv für die Chirurgie の雑誌は Bergmann, Billroth, Gurlt の連名で發行する事には賛成であります。……それからランゲンベック先生の追悼文の執筆者の事ですすが誰が書く事になるのでせうか？ 同先生の門弟としては時代から考へて Gurlt, Esmarch, Billroth と云ふ順序となる譯です。そしてエスマルヒは故先生とは個人的にも深い關係にあるんですが資格から云ふと貴下です。それとも是非拙者に書けとなれば中々時間がかかりますから次年度の外科學會を ランゲンベック追悼會として 一場の追悼演說會を盛大に施行すべきだと考へてゐます。何れにしても貴下の考への通りにして下さい。拙者は近頃兎角怠け者となりました。……』

101. 在ベルリン，グルト教授に宛てゝ。

『……御希望に任せ 兎に角に拙者の L. 先生追悼文の草稿を送りました。だが次回の外科學會の L. 先生追悼會には是非共ベルクマンが一場の追悼演說をせなければならない役割だと思ひます。その事は考へれば考へる程可なり六ヶ敷い問題です。此解決はベルクマンがするだらうと思ひます。それから貴下とエスマルヒとベルクマンの加入も必要です。但しその役割が若しも拙者に降りかゝつてくるとなると 貴下とエスマルヒと アルノイドの助力がなければ出来ない仕事です。そして又ベルクマンが總帥の役者でなければならないと思ひます。……』

恩師ランゲンベック教授の葬儀と云ひ又その追悼會と云ひ 伯林行きを避けてゐた理由は解らないにしても兎角伯林行きを嫌つてゐたらしい事が解る。

102. 在ハイデルベルヒ大學，チエルニ教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (ウキンより 58歳)]

『……其後拙者の健康状態は頗る良好だ。體重 101 kg から 85 kg へ減少したよ！ そして周圍の人々は拙者が若返つた顔貌だとひやかすよ！ 以前は運動も可なり難澁であつたが近頃は雨が降らうが風が吹かうが毎日 20—26 km を歩いてゐる。然も山に登り山を下りなどしてゐる状態なのだ。……拙者の私的醫業は近頃急に減つて來た。だから儉約生活をやらねばならな

いと云ふ始末さ。……3人の子供は大きくなるし費用が高むので邸宅を売却しようと考へてゐる。それは餘り金を食ひ過ぎる邸宅だからだ。そして大學教授職も退きたいと考へてはゐるが子供の將來の爲めにそれも實行出来ないのが惱みだ。人生の下り坂と云ふものは決して美しいものではないよ。……』

樂岡子！孤城落日でないがまだ58歳である外科の大家 B.でさへこんな氣持があつた。凡ての老人は寂しがらるものである！

103. A. 在伯林, シュメルリング夫人に宛てゝ。

[1888年 明治21年 (ウキンより 59歳)]

註。B.の姪にして軍人の未亡人なり。

『……近頃拙者は Mantegaza 著の Physiologie der Liebe を讀んでゐる。但し娘ドーラの不在の時だけだよ。若い者には此種の本は如何にも挑發的である。半ば學問的半ば肉欲的な事が書いてあるが老人共には餘り大した刺激にもならないよ。妙な繪畫と同様なものだ。……』

樂岡子！59歳の老人 B.が然も娘に内證でこんな本を讀んでゐたのも面白い感がする。

103. B. 在伯林, シュメルリング夫人に宛てゝ。

[1888年 明治21年 (ウキンより 59歳)]

『……マンテガツツアの本と2,3の圖書を送る。……多くの男性は弱いものである。若しも自分の愛する女性からあるものを要求せらるゝなればだ！……だからこんな本は續けて讀むべからずだ。眼の毒と云ふものだ。そして全部を讀むにはあまりに退屈だ。……我々人間の作業なるものはシャボン玉と同様なものだ。そしてその表面には種々な周圍の映像が美しく現はれて來るが最後は破裂して跡形も残らないものだ。……』

59歳の老人 B.の人生の無常觀も一考すべきである。

104. 在伯林, シュメーリング夫人に宛てゝ。

[1889年 明治22年 (アバチャより 60歳)]

『……アバチャの靜養地では天下泰平だ。拙者は午前中は町の周圍の山々をかけ廻つてゐるし午後は娘共と散歩してゐる。そして夕景になると暖かい部屋でランプの下で讀書してゐるし執筆もしてゐる。そして音樂だ。此の世の中の人々はこんな愚痴話に意味を感じないものが多いが結局は思想上の遊戲に過ぎないものだ。……拙者は仕事の結果を期待するよりは仕事そのものに興味を持つ様になつた。それが好運の時には確かに何かよい結果を來たす事もあるのだが、上手な登山者は雲の中に無限に續いてゐる、それは高きへ高きへと不休に山を登つて行くのと同じだ、そして其の坂路の途中で最多數の人間はある高臺まで登つて行つて其處で氣樂に休息してゐるがそれもまた幸福とも云へる。……』

樂岡子！無限の坂路を汗を流して登つて行く人もあるし又小松の蔭に四方の景色を眺めながら飲めよ歌へよと喜ぶものもあるし、又折角登つて行つた高さから足を滑らして谷底へ墮ちる人もある。それは御勝手であるまいか。

105. 在バーゼル大學、ゾチン教授に宛てゝ。

[1889年 明治22年 (ウキンより 60歳)]

『……君の伯林外科學會の批評は面白いがそれ程までに悪口を云ふにも及ばないではないか！然しそんな學會は後輩の爲めに何か遺してあるか？病理解剖組織、細菌學、外科的技巧等は今日知られてゐる解剖學及び生理學上の智識から考へると殆んどやり盡して了ふてゐると云ふてもよいのだ。だから何か新奇な事でもやらうと思ふてもつまらぬ事項だけだ。行き詰つてゐると云ふものだ。だから目下最も必要を感じてゐるのは「批判」なのだ。それには深い經驗と學問が入用なのだ。……「殺菌的制服」凡て外科的の事は現時では殺菌的制服 (Antiseptis-Uniform) を衣てゐる。特に戦争でもあれば軍陣外科に於て最も然りだ。だから人の「個 (Individuum)」と云ふ事に就いて考へる事は全く後退したと云ふてもよい。……我々の醫術と云性「ふものの3/4は學問と技巧だ！換言すれば技巧商人と云ふべきものだ。……』

106. 在ハイデルベルヒ大學、チエルニ教授に宛てゝ。

[1889年 明治22年 (サンギルケンより 60歳)]

『……拙者の邸宅はとうとう賣つて了ふたよ。そして妻はウキン市へ移住したので拙者は此處に2人の娘と氣持よく靜養してゐる。拙者の現在の助手は Salzer と Eiselsberg の2人だ。特に Eiselsberg は人間としては好人物だ。だが少し黙り過ぎる。そして遠慮勝ちの人間だから君も十分後援してやつてくれ！E.の得意な手術は胃切斷と小兒の泌尿器の成形術なのだ。……拙者は總ての機會を利用して獨逸の外科學界と結合しようと考へてゐる。……』

此の E. の事は三堺老先生が知つてゐる。

107. 在伯林、ドクトル、レウキンスタインに宛てゝ。

[1889年 明治22年 (ウキンより 60歳)]

『……煙草は確かに毒に相違ない。嘔氣、眩暈、心悸亢進、冷汗等々は確かにニコチン中毒であります。十分乾いてゐる煙草は多少ましですが紙巻煙草と云ふ奴は考へものだと思います。神經衰弱、眼筋及び眼神經の衰弱、そして盲目者さへ出來ると亞米利加の醫者の報告もある位です。それも個性によりて違ひますから一概には云へないのですが少なくとも青年には勧めない方がよろしいと思ひます。……然し多くの場合には喫烟は慰安と退屈しのぎになる。特に農民などは確かに退屈しのぎの爲めに喫烟するのです。そして酒類と同じく廢止の出來ない惡癖となります。又飲酒家と喫烟家の高級階級の子孫に之が爲めに神經の弱い者の産れ

て来るのは事實です。そして近時神経病者及び精神病者の増加したのもそのためであるだらうと考へます。特に適度の習癖とならばまだよいが無用の亂酒、亂烟のために神経超過敏性になるのは當然と云ふべきであると云ひたいのです。……』

108. 在ゲツチンゲン大學、マイスネル教授に宛てゝ。

[1889年 明治22年 (ウキンより 60歳)]

註。M. はゲツチンゲン大學生理學の教授であつた。

『……近頃公表された Rosenbach の實驗の事だがそれによると健全なる動物を殺して即時に實驗して見ると其の臓器には微生物が存在してゐないのに時間を経た動物の臓器内には微生物が発生且増加すると云ふ實驗の根本的理論的の價値に就いて拙者は賛成出来ない諸點がないでもない。それは死後の臓器内で微生物が発生増加しないと云ふ場合は餘り多くはない事なのだ。……だから胃中で Coccen 及び Bacterien が消化せられずに保在せられてゐるのは丁度呼吸によりて炭とか塵とか又は金粉などの如き非活體が往々氣管枝腺内に發見せらるゝ場合と同様であるまいか。然し必ずしも凡ての場合同様であるとは云へないがこんな物質が一度淋巴管内へでも入つて行けばそれから血行へそして組織内へ進入せないとはい限らないではないか。だから拙者の之迄の觀察によれば、少なく共之迄の實驗法によれば、皮膚の損傷のない屍體の腐破し且壞疽に陥つてゐる腓腸筋内には決して微生物が證明出来ないのは、まだ解剖されない心嚢内の液汁又は腦脊髄膜内にて細菌などは證明されなかつたと同様な實例もある。然し他の場合に於て皮膚には何等の損傷なくして股關節とか又は上膊骨膜炎の膿液中に多數の Coccen を發見した事もある。だから手術の際に外部ではなく内部から微生物が何處ともなく進入する場合も決して少くないと思ふ。……之は是非共動物實驗によりて研究すべき事だと思ふ。……』

樂岡子！ 之が50年前の外科の大家の細菌學上の智識であつた。然も當時 Koch が既に結核菌及びコレラ菌を發見してより4, 5年後の事であり世は萬病細菌原因論に傾きつゝあつた時代であつたのに外科の大家の細菌學の智識はこれであつた。

109. 在ウトレヒト、エンケルマン教授に宛てゝ。

[1889年 明治22年 (ウキンより 60歳)]

『……今日の狀態は凡ての外科醫は皆防腐法の制服 (antiseptische Uniform) を着用する事になつた。そして色々な學派と云ふものはない様になつてきて唯だ大なり小なり昔時ながらの商店 (Firma) 名だけ持つてゐるだけだ。だから君も若い働き盛りの助手を養成する事が必要だ。拙者の弟子の中から Czerney (Heidelberg), v. Winiwarter (Lüttich), Miculicz, (Königsberg), Gussenbauer (Prag), Wölfler (Graz) などと云ふ人々を教へ上げる事は出來た。そして目下2人

の有力な助手が居る。即ち Dr. Salzer と Dr. Eiselsberg だ。其中 Eiselsberg は南墺國の産で舊教徒で 29 歳で 4 年來拙者の優秀な助手として働いてゐる。昨年暫時伯林の Koch に就いて細菌學を修得した。そして近き將來に ウキン 大學講師に推薦しようと考へてゐる。……61 歳にもなれば外科學上の根本的主義を變更するのも至難な業である。……』

110. 在 ウキン 大學, ドクトル, ゲルズニー に宛てゝ。

[1890 年 明治 23 年 (アバチャより 61 歳)]

『……拙者は近頃恐ろしい怠け者となつたよ。但し拙者の怠け様は拙者だけの事だ。そして拙者が怠け者になつてゐるがために他人が勉強する様になると云ふものだ。……拙者は Über die Einwirkung lebender Pflanzen- und Tierzellen auf einander. の一文を書いてゐる。馬鹿な仕事だらう?! 君! 之は拙者の Coccen-Bakterien の業績の様に愚なものだ。こんな仕事は元來拙者の力以上のもので恐らくは 1 人の仕事では出来ない問題なのだ。然し現代の哲學者は「意思の自由」なるものはないと論じて「唯だ人間はするべき事はせなければならない。人間はせなければならない事をしてゐるのだ」(Man muss, was man thut und thut, was man muss) と云ふてゐるではないか。だから拙者が一度手に筆を執れば唯だ墨汁が流れて出てゐるのだよ。仕方がないのだ。唯だ此の際拙者のために重要な事は執筆してゐる間だけでも幸福感を抱いて居られると云ふ事を想像し得ればそれでよいのだ。斯様に考へて見れば甚だつまらない仕事なのだ。之を活版に附するか否やは後日の事なのだ。……』

樂岡子! 此世の中には唯だつまらない事を書きまくる人もある。又つまらない事を饒舌つて饒舌り倒して喜んでゐる人もある。そして考へて見れば何れもつまらない事なのだ。紙を費し時間を費し人を費すだけなのだ。然しそれによりて幸福感を得るらしい。そして老人になると一生を通じてやつてきた仕事に飽きて他に何かによりて慰安と幸福感を求めたいのである。B. も亦其の晩年には同じ考へであつたらしい。

111. 在 ウキン, スエーゲン 教授夫人に宛てゝ。

[1890 年 明治 23 年 (ウキンより 61 歳)]

註。此手紙の日附が 1 月 30 日午前 2 時とある。不眠症になつた B. の深夜の執筆らしい。

『……不眠! それは誰でも神經的に亢奮した時とか疼痛とか飢餓のために苦しむとか云ふ人々は能く理解出来る状態であります。然し其他に意識しない原因のための不眠症もあるのです。私は今日甚だ氣持よく夕食もしましたし又 9 時頃迄愉快に雑談もしました。そして 9 時に書齋に入つて次の醫學會のために演説する草稿を書きました。然し之も何等亢奮すべき問題でもなく平氣でつらつらと書き了つたのですが 11 時頃に眼が少々疲れて來ましたので就床しました。前夜は夜の 11 時から朝 8 時半迄熟睡もしました。今日は臨床講義も面白くやつてのけましたし血氣盛んな助手共相手に頗る愉快的 1 日を暮しましたのにさて眠れないので

す。然も病氣でもないのですのに！何故でせう？……』

樂岡子！Bは末文に「何故でせう？……」と書き終つてゐる。老人は何とはなしに寂しくても眠られない。何とはなしに愉快でも眠られない。實に困つた者は人間である。そして夜半不眠のために床を蹴つて飛び起き 無用の文筆を戯する氣持は 痛飲甘眠鼾聲雷の如き人々の了解出来ない苦痛である！Bもそれであつた。

112. 在ウキン大學，ドクトル，ブラームに宛てゝ。

—4月5日夜12時半—

[1890年 明治23年 (61歳)]

『……今日は終日何だか騒がしいイライラした1日だつた。拙者は化膿性の患者の手術で負傷した指の痛みで目が醒めた（こんな事は稀れではない。暫時にして治るだらう）。それから鈴の音が聞えた！朝食の用意が出来たと云ふ報せだ。妻と娘と一緒に朝食した。それからホテルから使者が来る。會議の出席となる等々そして内職の往診，それから臨床講義，10時を過ぎる事20分たつた。2時間が程は教師となり 手術家となつた。そしてやつと手術室から出て来ると訪問の人間群の包圍だ！その用を済ませて歸宅，そして20分間の晝食が済むと又重症患者の手術に出掛ける。それが2時間もかゝつてヘトヘトになつたがやつと手術が出来た。そこでコニャク酒2杯をぐひと引つけて勇氣を取りもどしたと云ふものだ。急いで家へ廻つて歸ると6人の患者が待つてゐると云ふ始末だ。其の多くは我樂久多患者か若くは不治の患者と云ふものだ。ウソつきだ。ウソつきだ。唯だ慰安してやるためのウソつきだ！それがやつと済むと 午後の家庭の御茶の會となる。それから又4軒程往診だ。それから半時間程休憩だ。やれやれだ。やれやれだ。それから音樂會だ。そして歌も音樂も頗る氣に入つた。それで氣持がよくなつて家庭で夕食少時休憩！それから6通の業務的手紙を書いた譯だ。……拙者は既に老人なのだ。……だから自分ながら解らないが何んだかの欲求がある。それは氣樂な生活への希望らしい。然しそれは如何にも馬鹿らしいとも考へるが拙者はどうしてよいか解らない。……考へて見ると拙者は1枚の完全な衣服を着てゐるのではなく千百のボロを着てゐると同じだ。拙者の力も拙者の仕事も 何等まとまりもなくばらばらに分解してゐると云ふものだ。そして拙者の能力も衰弱し切つてゐるのに世の中の人々は拙者にますます要求してゐる様だから實に苦しい。此の心持で詩が出来た。

Nur Kampf! Und immer wieder Kampf!

Wann giebt's denn endlich, endlich Frieden.

Es thut nicht gut! Ich kann nicht ertragen.

Wie mich die Menschen täglich, stündlich Quälen

Wie sie Unmögliches von mir begehren!

.

……(詩は話さない方が味がある)。これから疲れ果てゝ寝るばかりだ。モルフエウスの神に抱かれて安樂に眠りたいと希ふのだ。……』

樂岡子！ 大家程忙がしい。忙がしい人程心の底には種々な悩みと希望の連鎖があるものである。だからもつともつと偉くなつて泰然自若になるか、もつともつと馬鹿になつて泰然自若となるかであるまいか！

113. 在ウルツブルヒ大學, リンドフライシユ教授に宛てゝ。

[1890年 明治23年 (ウキンより 61歳)]

『……拙者は今年61歳になつた。そしてまだ教職に居るのだがこんな老人のたわ言を各方面から聴いてくれるのも有難いと云ふものだ。勿論心の中で嘲笑してゐるものも少くはなからうと思ふ。……拙者は目下大いに心理學と道德論に就いて勉強してゐる。そして 1) Beiträge zur Anatomie der menschlichen Gesellschaft. 2) Das Gute im Menschen. 3) Mitbewegung und Mitempfindung als Fundament der Ethik. 4) Zur Physiologie der Musik. 5) Was ist musikalisch. などゝ云ふ雜文を書いた。

B. は61歳になつてもメスを捨てたのではないがメス以外に専門以外の形而上學の方へも筆を弄するのが老境の唯一の慰安としてゐたらしい。Physicus から Metaphysicus になるのは老人の通癖である。

114. 在ウトレヒト大學, エンケルマン教授に宛てゝ。

[1890年 明治23年 (ウキンより 61歳)]

『……ドクトル, ザルツア (Dr. Salzer) が此の6月にウトレヒト大學に就任する事になつたのは大いに慶賀すべきである。それ迄に此處での研究業績を完成するために大いに勉學してゐる様だが拙者はそんなに勉強せいでよいから大いに將來のために餘力を養ふて置けばよいと云ふてやつてゐる。人間は都會の渦卷の中央に居るよりは小都會にあつて靜かな環境の中で勉強する方がよいと云ふてゐるのだよ。……拙者の神經は最早長續きはせないらしい。だから休暇は必ず利用して拙者の頭腦を冷してゐる次第である。……』

樂岡子！ 都から田舎へとあこがれてゐる。B. 老ひたりである。そして長命の出來なかつたのも故ありだ。仕事が忙し過ぎたし神經が超過敏の性質であつたらしい。

115. 在ウキン大學, ドクトル, ベツテルハイムに宛てゝ。

[1890年 明治23年 (サンギルケンより 61歳)]

註。建築技師

註。此手紙の日附9月2日の下にセタン戦争後20ヶ年紀念の日と書いてあるから丁度日本の帝國議會第1回召集の年で今日より49年前の事であつた。此時分に B. は多年計畫してゐたルードルフキネル・ハウスと云ふ看護婦養成所を少なからぬ私費を投じ又公費を使つて設立する事に腐心して居たのであつた。

『……井戸も掘れ泉水も湧いて出たと承つたが大いに結構な事だ。之に過ぐる喜びはない。然し建築費は又嵩むであらう。2萬フランは富籤募集で得られるにしてもまだ不足だらう。老人の拙者も若返つた氣持で活動しようと考へてゐる。之も將來の若い人々の爲めだ。だからルードルフキネル・ハウスの設立と病院の建築、醫師會館の新築が出来る日まで生存して居られたら拙者の惡口を云ふ者はあるまい！ 前進前進。最も困難な時に最も大なる救助が来るものだよ。61歳の老人も壯年になつた氣持だよ。……』

樂岡子！ B. の計畫した諸建築設計が來たのを喜んだ手紙らしいが期待した日まで B. が生きてゐたであらうか？

116. 在ウキン大學，グルウベル教授に宛てゝ。

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

註。建築技師

『……これは驚いた。金が足らないとなア以ての外で御座る。合計3萬フラン！ それ位な少額の金で何が出来ると思ひなさる。全體で13萬フランの金が必要なのに僅かに3, 4萬フランでは何が出来るか！ 馬鹿な話で御座る。拙者の様な老人で種々な悩みの持主であるのに其の上に又心配事が増えて來たと云ふもので御座る。だから寧ろ拙者は卒中にでも罹つて凡ての「わすらい」から解放されたいと思ひますよ。……』

樂岡子！ 前文の如き歡喜から僅かに1年後本文の如き悲痛の手紙を書いてゐる。

117. 在ハンプルヒ，ドクトル，ラウエン・スタインに宛てゝ。

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

『……拙者のウキンに於ける事情は全く變つて來た。社交界からは逃げ出したし、邸宅は賣つたし馬車も人手に渡した。そして小さい借家住ひとなつて了ふた。それに神經過敏症になつて音樂にも遠ざかつてゐるし集會にも出ないし芝居見物もせないのだ。そして唯だ拙者の教職と業務だけを守護してゐると云ふ始末である。往年拙者は此地の音樂界の多くの有名な音樂家とも關係があつたし又有名な音樂家も招待した事も數々あつたが今日ではそれは昔時の夢となつて了ふたよ。そしてこんな事情だから大都會に生活してゐても數年來はまるで何處か山地の田舎の植民地に居る様な生活振りなのだ。だから今日では嘗て樂しかつた生活は昔時の夢となつて了ふた譯である。そして心配事と煩悶の中に生活してゐる。これでは拙者は到底長命の出来る筈がない。

樂岡子！ 豪華な生活をした有名な大家が恐ろしく貧乏したものと見える。榮枯盛衰は世の習ひ、貧乏牧師の子が長じて富者となり、老いてまた貧者となつた。

118. 在クラーツ市，ウオフレル教授に宛てゝ。

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

『……拙者の考へでは2萬人の住民のある都市に醫者の自由開業を許して各醫區に1醫者を

配置して置いて生活が困難な者には數年間補欠のためにある一定したる俸給を與へるべきものでそれは國家のなすべきものであると考へる。然るに今日の如く至る所で醫者の自由開業を許してゐては醫者の一般的普及は望まれない。例へば住民の多くが洗足で歩んでゐるある田舎町に多數の靴屋が開業したら如何だ。とてもその靴屋は生活して行けないではないか！それから又田舎町に1人の醫者が居るとしても百姓が獸醫を呼んで治療を乞ふた場合にはどうだらう。それから又出産の場合にも産婆が少しも手を出せない横産であるのにその村に醫者がゐないが爲めにその家の主人が遠い村からカタカタ馬車で醫者を迎へに行かなければならないと云ふ場合には人命にかゝる事ではないか！そして昔時の純朴な田舎外科醫が全く影を没してゐる今日ではないか？……此處サンギルケン村では勞働者は夏期には1日の賃金が1.20—1.50 FRであるのにウキンの大都の製造所では3.0—4.0 FRなのだ。然るに田舎では3ヶ年の修業の後に漸やく1人前の田舎醫者になつても1日に僅かに50—80 クロイツェルだけの收得で生活のため充分だと思ふのは無理だ。だからと云ふて今日に於ては昔時の様に風呂屋の亭主、理髮屋の若者が田舎外科醫者になつてくれては大變ではないか！こんな社會的の矛盾と葛藤の問題では國家とか市町村とか、然るべく取扱ふべきであるのに少しも此問題には干與せず放つて置いてあるには驚くではないか！此點に就いては佛蘭西共和國は中々考へてゐる。そして多數の醫者に Officier de sante と云ふ名稱を與へて全國に醫者の適當な配置をしてゐるではないか！獨逸でも我々の修學時代にはハンノーベル、ヘツセン、フラウンシュワイヒ諸州などは同様であつたのだ。……此の事について老人のたわ言は之で止めにする。それで君の古い友人であり且つ師匠であつた拙者の意見は解るだらう。……』

樂岡子！50年後の今日此の點に就ての改良は如何だらうか？依然として醫者も商人も勞働者も都會集中となつてゐる。

119. 在ウキン、ドクトル、アイセンベルに宛てゝ。

[1891年 明治24年 (バーデンより 62歳)]

『……62歳！今日は拙者の62回の誕生日の祝賀に對して感謝するが拙者の第63歳から始まる學期は餘り健全ではないのだ。それは轉地療養を試みても拙者の氣管枝加答兒は輕快もせないし發音にも注意と抑制を要する次第である。それで終日黙り込んで室内に靜居して食物と飲料とを節減して居りさへすればそれで日中はまづ堪へ得るが。さて夜間是不眠であるし咳嗽も出てくれば起きねばならないからこんな時は非常に疲勞感がある。が此の際には何か本を読むとか筆を取つて書きさへすれば疲れて何時とはなしに眠られるが眠られたかと思へば直に醒覺するのでまた起きると云ふ始末さ！恐らくはインフルエンザにも罹つてゐるのではないかと思ふてゐる。だから今週は教職の事やら業務上の事やらはとても考へられないから何か拙者の署名を要するものでもあれば御面倒だが使者を此處まで遣はされたい。こんな

病狀だが此際休暇を願ひ出る事も嫌なのだ。それは數週の中には輕快するだらうと期待してゐるからだ。……』

樂岡子！ 老軀となつてそして病人である B. の力行に哀を催すではないか！

120. 在ウキン市，ドクトル，ムンデーに宛てゝ。

[1891年 明治24年 (サンギルケンより 62歳)]

註。看護婦學校 ルードルフキネル・ハウスの建築に就いて老 B. 教授を惱ます。

『……大臣は 拙者の建築事業の爲めの 富籤發行は まかりならぬと云ふが 其建築費等々には 100,000 FR は入用なのだからそれより少額の金員ならば 何の役にも立たないと云ふものだ。だから多年の是等拙者の計畫は 全く萎縮症になつて了ふたと云ふものだ。此の上に病院の新築工事と醫師會館の設立もあるのだが之等の事に就いては拙者は完全に捨鉢の氣持なのだ。……此處の生活は思ふた程靜かではない。2, 3 度は商議醫を斷り切れなかつたので Aschl へも Ausee へも 醫者として旅行もせなければならなかつたし又此處でも雜多な商議醫とならなければならぬ始末だ。……以前の様な強行的の散歩も舟遊びも少なからず神經を疲らすから制限せなければならぬ状態なのだ。然も近頃は恐ろしく發汗性になつて 其の際以前の様に飲料水を飲まない様に 頑張る程の意思もなくなつたので 瘦削すと云ふより寧ろ肥滿すると云ふ傾向なのだ。だから今年の夏期休暇の療養は失敗だつた。……9 月の休暇中には ウキンへ歸れるだらうと思ふてゐる。……』

樂岡子！ 病院の改築，看護婦學校の設立，醫師會館の建築等々 B. 多年の希望は經費の爲めに沙汰止みとなつたのが B. の晩年の一大痛恨事であつたらしく，加之脂肪心臟症狀の増進が一入 B. の終期を早からしめたやうに考へられる。

121. 在ウキン，ドクトル，フォンムンデーに宛てゝ。

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

『……赤十字社の事業の爲めに御熱心の様だが拙者の如き老輩は最早進んでその事業の爲めに奔走するのは不可能であります。特に武器が改良せられた今日に於て猶更の事だ。これには近代の戦争に體驗のある武人とも相談せなければならぬ必要があるが君には其必要もないのだから充分な材料はあるだらうと思ふ。……近頃拙者は不相變不眠と神經症に悩まされてゐるし呼吸も少々苦しいし心臟の搏動も之迄にない程不正だ。だから最早多くの精神的仕事をそれからそれへとやつて行く事は不可能となりました。……』

122. 在ウキン，ドクトル，フォンムンデーに宛てゝ。

—12月7日午前4時記—

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

『……今夜は11時から3時半迄眠れました。さうして目が醒めたので貴下への手紙を思ひ出して今返事を書いてゐるのです。……拙者の病狀は依然たりであります。そして Nothnagel も

Bamberger も診察したら同じやうに云ふでせう。

「ビルロート君！ これに軽度の肺炎とが又は毛細氣管枝炎が併合したらなア、ビルロート君、さようならだ、さようならだ」と。

それで近頃はストロファンツスとコニヤク酒の内服を試みてみますが拙者が手術場で手術をしてゐるのを見たら

「彼奴め、まだ死なないのかなア」

と考へる人があるかも知れないよ！そして拙者の心臓が急に停止すれば若い外科醫は確かに拍手して喜ぶだらうと思ひます。然し拙者の死後は定めて後繼者の事で色々の騒ぎが起るだらうと思ひます。……』

123. 在ウキン、ドクトル、フオン・ムンヂーに宛てゝ。

[1891年 明治24年 (ウキンより 62歳)]

註。リスター氏防腐法に就ての辯明。

『……拙者は多年 Lister 法を卑下してゐた1人であつた。その譯は Lister 氏法に就ては當時何等學問的根底がなかつたからだ。然し其後拙者としても其方法に就て學問的根底に1, 2の研究業績を補ふたし又コツホの完全なる研究方法が案出された今日では拙者も身心一體になつて Lister 氏法に大賛成を表した次第である。……拙者はある時ベツテンコーヘルに「P. 君！君は大なる學問的進歩は所謂其の専門學者から案出された事があるか知つてゐますか？」と尋ねて見た。するとP. が云ふには「醫學者が細菌學に就いての非難を最初植物學者に大いに抗撃されても餘りに大事とは考へてゐなかつた」（植物學者の「コース」の細菌病原論を醫學者が顧みなかつた事を云ふのである）。然るに素人植物家から病的細菌學と云ふ廣大無邊の視野が開かるゝ事になつた。だから大學の學者は餘りこだわり過ぎて實際の事實には無關心である。又大理學者の Gaus と Weber が電信の根本に就て研究はしてゐたが其の發達と應用には無關心であつたらしい。だから理論家は理論だけで満足するが實際家は其の理論の應用に就て研究し且成功するものだ。だから拙者の Lister 氏法に對する非難の態度も同じ事なのだ。それは少しも恥づべき事でも悔む事でも残念がる事でもないではないか。……』

樂岡子！B.の云ふ事は本當である。負けたのでもなく勝つたのでもなく双方のスツタモンダの結果が事物の成就ではあるまいか。

124. 在ダンチヒ市、ドクトル、エールーケルに宛てゝ。

[1892年 明治25年 (ウキンより 63歳)]

註。ダンチヒの一開業醫。

『……新聞の誤報でもあるか少なく共拙者は1852年12月30日に Dr. Medicinæ etc. の學位を得たのは確かである。そして其後丁度今年で25ケ年間ウキン大學に在職した事になる。月日

は早いものだ。それから拙者の第2女が結婚して孫まで出来た。そして拙者はまだ教職にあつて働いてゐる。があまり愉快ではないのだ。それは病院の改築の一件が許可されないので教職に居るのも最早嫌になつたし又健康状態も甚だ悪い。……』

125. 在ウキン、ドクトル、ゲルズニーに宛てゝ。

[1892年 明治25年 (サンギルケンより 63歳)]

『……拙者は此處へ來てから一切のアルコール含有飲料は止めて了ふた。そして唯だ礦泉だけを飲んでゐる。又喫煙も止めた。蓋し酒類と煙草は拙者の心臓にはよくはないらしい。爾來數週間になるが少々は快い方へ向ふてゐるが以前のエネルギーは全く消滅した様だし又愉快的な気分は全くなくなつたから黙つて食卓について食事後は一層黙り屋になつてゐる。だから心臓の障害を酒と煙草との原因とすべきだらうか？ 左様でなければ一杯の麥酒と少量の葡萄酒と軽い煙草の少量位用ふるのはあまり害にはなるまいかと思ふてゐる。それはあまり寂しいので少し位は他人と談話しても見たいと思ふてゐる。Breuer 君は拙者は最早此上脂肪過大にはなるまいし又神經症狀とか衰微とか云ふのは唯だ心筋炎の結果だと云ふてくれてゐるが拙者も同感なのだ。然し強度な筋肉運動と神經亢奮と氣管枝炎とは警戒してゐても急激に心臓の運動が止まる場合もあるだらうか？ 又心臓破裂の起る場合もあるだらうか？……拙者の遺言書は既に作成して箱の中へ收めてあるし鍵は金箱の中に入れてあるし其戸は嚴重に閉ぢてあるのだし遺言中には「解剖御斷」と書いて置いた。……(勿論裁判醫學上とか又は衛生醫學上とかの場合には除外としてだ。)それから葬儀と其場所は家族の任意とするがよいと考へてゐる。其他の事は云ふて置くべき事件もない。拙者は一生世から恵まれた。そして多く世に與へた。そして拙者は全生涯を善良に生活して來たと云ひたいと云ふものだよ。……』

樂岡子！死期を豫感したと云ふのは此の事だらうか？ 將又こんな弱味噲になつたから死期を妄想したのか？ 此種の實例は少くない。が人間は死を悟らずして死んで行く者は最大幸福者であると云ふ立場から考へたなれば B. の終焉はあまり晴々とした事ではなかつたと云へる。同じ外科大家でも Prof. Dieffenbach の頓死の如きものもある。だから古い話だが支那の孔子は盜妬の如き惡徒の 不意の急死を聞いて天道果して是か非かと考へたのも御尤もの次第である。

126. 在ウキン大學、オフンチツテル教授に宛てゝ。

[1892年 明治25年 (サンギルケンより 63歳)]

『……拙者の不快な氣持の表情は確かに他人に不快を與へてゐるだらう。拙者は人嫌ひになつたので面白いべき集會の席にても唯沈黙勝ちであるので定めて他人には不快な事になるとは考へてゐる。……そして自分では業務は此儘やつて行けるとは思ひながらも矢張退職した方がよからうと云ふ考へは止まないのだ。それは臨床講義とか手術とかでは拙者はまだそれ

程疲勞と倦怠を感じないのみならず反つて之によりて鬱幽な氣持が幾分でも治るのである。Breuer も Nothnagel も異口同音に退職などはせずその儘やつて行けばよいと云ふてくれるし、數週來自覺的にも諸症狀が輕くなつた氣持もするし、又先達頃迄は夜間は殆んど半座の位置でなければ居られなかつたが近頃はよく眠られるから當分先づ此儘居居つて居らうと思ふてゐる。然し嘗て大いに快活なそして大いに熱心なビルロートは既に葬り去られて今は其の影像があなたにフラフラしてゐるのだと考へ給へ。そして近頃は飲食物の分量にも強い精神的感動にも餘程注意しなければならない。それも皆自分の小供等の將來の爲めに此苦業を續行しなければならないと云ふものだ。……』

樂岡子！ 子供子供！ 親は小供の爲めに終生苦勞しなければならない生物である。そしてそれが天則である。それは偉人でも平凡人でも同じであるまいか？！そして子供は左様には考へてはくれないものだ。

127. 在クラーツ市、ドクトル、ウオルフナーに宛てゝ。

[1892年 明治25年 (ウキンより 63歳)]

『……此の夏期のサンギルケン療養はあまり良好ではなかつた。それは夜間は數々呼吸困難の發作と不眠症で苦しまされたからだ。そして「之が汝の最期だぞ！これが最終の滞在だぞ！」と何處からともなく耳に囁かれる氣がして如何にも哀れつぽくなつた。……其後ウキンへ歸つて外科手術場で君等一同を見廻すと心中竊かに矜を感じる事がないでもない。然し又之が「最終の手術だ」と云ふ考へも浮び出して來るのだ。……昨日は格別の苦勞なしに可成り困難な卵巣剔除も平氣でやつてのけたし今日は半時間も臨床講義をやつた。それで又勇氣を盛り返へしたと云ふものだ。それから昨日の演説は上出來だつた。(註。此の日は25年在職祝賀會があつたらしい)。勿論拙者は内面的には大いに亢奮したがその爲めでもあるだらうが不眠で一夜を明したが心は平和の中に居られた。……』

128. 在ベルリン、シュメルリング夫人に宛てゝ。

[1892年 明治25年 (ウキンより 63歳)]

『……世の移り行く事よ移り行く事よ！人々の變つて行く事よ變つて行く事よ！！特に小供等の姿の變り方がひどく目につきます。特に拙者の娘達は同一の母から産れ同一の母から育てられてゐながら近代流に獨立感と絶對的な個性的な權利の主張が恐ろしく發達して昔時拙者等が拙者等の兩親に對した思想と態度とはまるきり異つたのに驚いてゐます。人間社會と云ふものが僅かに50年100年間に斯様に變化するとは全く思ひもよらない事でありました。……拙者の近頃の饒舌振りと思痴話は全く不眠症の結果であると考へます。昨夜はモルヒネ内服の助でも僅かに1時間より眠られませんでした。……』

樂岡子！ B.も遂ひにモルフェウスの神の威力を頼む老人となつた。もう駄目だ！

『……今夜は晝の仕事の疲勞の爲めに11時頃に就床したが午前1時に目が醒めました。それで寢椅子に倚つて睡眠を試みましたが、全く不可能でした。だから起き上つて燈火をつけてそして室内散歩を試みましたが一向に疲勞感が生じて來ないので仕方なし執筆です！ 丁度今時計は朝の4時を報じましたのに一向に疲勞感がやつてきませんのでまた筆を取つてあなたに何か書かして戴きます。……先日私の第40年ドクトル祝賀と25年大學在職祝賀會がありまして非常に盛大でした。同僚のアルベルトが一場の祝賀演説をしてくれました。それは辭令的ではなく眞に歴史的に誤りない事を演説してくれました。……もう1ケ年は生きてゐたいのです。左すれば拙者の子供等の爲めにも多少乍ら資産を遺して行ける事になるのです。……我々の哀れな皇帝を御考へなさい。それは全國民の爲めに全力を盡して善かれかしと考へて居られるのです。考へて見ますと私は全く幸福者だとも云へます。私は今日に於ては私の専門の學問界に於ては最高の位置に上つてゐます。そして私の専門科の全學界を支配する榮冠を戴いた事になつてゐますので心中聊か矜としてゐる所ありますが政府は私に *Excellenz* の名號を與へやうとするのですが私はそれを謝絶しました。其の理由としては一は同僚界の關係上悪い結果が生じてくると二には私の業務上反つて之が爲めに損な立場に置かれるからであります。それよりは寧ろ我々の皇帝が設立しようとして居られる「名譽學位制度」にして丁度普魯西國に存在する *Civil-pour Le'merite* に相應したものを頂戴する方がどれだけ榮譽か知れません。此の *Civil-pour Le'merite* なるものは20ケ年に僅かに10人程の藝術家とか學者とかに授けられてゐますが數百の最も馬鹿な *Civil-Excellenz* と名乗る者が此の世の中を踊り廻つてゐるではありませんか！ こんな戲筆を弄してゐる中に早や朝5時の時計が鳴りました。だがまだ眠氣が襲つて來ません！ 悪くすると不眠症の犠牲になりますから今日は之で擱筆します。……』

樂岡子！ 不眠！ 不眠！ 遂ひにモヒ！ それでもまだ不眠！ そして無用の執筆！ それで又愈ゝ不眠！ 不眠の1夜を明したらしい。氣の毒な老人！ カルモチン、ヴェロナール、アダリン等の催眠藥があつたら1服盛つて上げるのに！ 氣の毒な老人！ B.の妻君は何處に居つた？

129. 在ベルリン，シュメルリング夫人に宛てゝ。

[1892年 明治25年 (ウキンより 63歳)]

『……昨今一寸ばかり氣分がよいのですがそれまでの10日間と云ふものは全く不眠で苦しみました。其の中に2度ばかり モルフエウスの神が助けてくれました。そして全夜其の神の腕に抱かれて眠りました。……それからと云ふものはまづまづ無事に業務に従事する事が出來てゐます。然し緊張力はありません。そして再びジキタリスを飲みました。すると其の力で數日間は私の心臓は御機嫌がよろしいがさてこんな戲弄が何時まで續きませうやら？ 私の主治

醫共はジキタリスがまた私の心臓に對して有効に作用すると云ふて喜んでゐますが然し私が考へますのは此のジキタリスの作用が無効になつた時にはじめて主治醫はその肩の荷を下して喜ぶだらうと思ふのです。その時はまるで水を離れた魚の様に狂ひ廻る事でせう。……』

樂岡子！ 此の時の主治醫の心配さうな姿が幻の如く現はれてくる。「醫者は自からを治せ」と云ふが醫者は又醫者を治し得ないとも云へる。兎角往生際の悪いのは醫者と坊主であると世間普通に云はれてゐる！

130. 在リユチヒ市、ウキニワルター教授に宛てゝ。

[1892年 明治25年 (ウキンより 63歳)]

『……拙者は2例ばかり簡単な Cholecysto-enterostomie の手術をやつた事がありますが我々大學の内科の諸家はあまり此の手術には賛成してはゐない様ですが貴下の行はれた Cholecysto-enterostomie に就いては大いに興味を起しましたが拙者としては此種の手術をやる勇氣は最早ありません。其理由は腸の内容物が膽嚢内に入つて惡質の腐敗的な炎症が起るかも知れない虞れがあると考へるからです。然し Probieren geht eben über Studieren と云ふ教へもありますからやつて見るのも悪くはありませんまい！……』

131. 在ウキン、ドクトル、ゲルズニーに宛てゝ。

[1892年 明治25年 (アバシアより 63歳)]

『……此の頃のアバシアの氣候と云ひ天候と云ひ風光と云ひ申分ない美しさだ。だから當分此處に滞在してあの暗い陰氣なウキンには歸りたくないよ！ そして臨床講義に出勤する希望などはさらさらないのだ。此頃は Spencer の Sociology を讀んでゐる。中々興味のある本だ！ 此の前の療養の時には 拙者は精神的にも肉體的にも頗る不機嫌で如何にも哀れな氣持であつたが今度の療養は確かに有效だから輕快するだらうと云ふ希望を持つてゐる。……其の中に再びウキンに歸れば ルードルフキネル・ハウス 完成の爲めに 5—60,000 FR を何とかして工面しようと思つてゐるのだし且又小兒科病院の爲めに 60,000 FR 位を募集する事が出来たら小型の 1 室に 6 病床入れる小兒科病室を建設して 10 人位の治療患者が入院出来るやうにしたい計畫だ。其會計は他の學科の治療患者に對する入費を節約すれば出来るだらうと考へてゐる。だから君も此の設計に就いて考へてゐてほしい。……』

樂岡子！ 病老人 B. は轉地療養地にあつても 碁と將棋と トランプと 八八、玉突等々に遊ばずに スペンサーを讀んだり又遠く思ひをウキン大學に馳せて 新設計を考へてゐる。これではとても B. が長命の出来なかつたのも當然であるまいか！

132. エルセ・ビルロートに宛てゝ。

[1893年 明治26年 (アバシアより 64歳)]

註。B. の娘に宛てたもの。

『……俺はおまへとある 1 點に於て共通してゐる事がある。それは社交界に出でゝ華やかに

表示をせない事である。俺は以前から俺の教室で俺の臨床科でそして又文筆的の創作等によりて十分な満足感を得たのだつた。そして公衆と接觸したり種々な祝賀會、會議等々凡て人々の集會する席等へ出席する事が非常に苦痛であつたのだ。之等の社交的生活は確かに自己の爲めにも利益であつただらうか？ 俺はそんな事を全くせなくともよかつたのだつた。又大衆の前に立つて演説したり又祝賀の席で卓上演説なども嫌ひであつたし又ルードルフキネル・ハウス設立(B. の設立した看護婦養成所)の爲めに寄附金を乞食して歩くなどは大なる苦痛であつたのだ。但し俺は個人を敬したり又尊重したりするのは無論人後に下らなかつたが人間の群集に對して如何にも嫌惡の感が生じて来る性質であつた。特に自己及自己の善事をわざと公衆に示して彼等の賞讃を求めるなど云ふ事は反つて自己の價值を低下さすやうな氣持であつた。然も少く共大なる人道的の計企の爲めには Moloch(舊代希臘の大神)の神前の犠牲の牛の様にならなければ何事も出來ないとは考へてゐた。そして多年自己の内面的のあるものと葛藤しながら是等の哀れむべき公衆の前に俺の矜とする頭を下げなければならない事もあつた。……藝術界の人々と同じく學問界の人々も學問的の業績が瞬時に其の世界に認められなければ價值は少ないのだが又何かの機會に時事問題に就いての僅少な業績の爲めに一時に有名になる人もある。それも藝術界と同じではあるまいか。……』

樂岡子！ B. が自己の性格を娘に物語つて娘に或る訓戒を與へてゐるのも學ぶべきであるまいか。

133. 在ウキン、ドクトル、フオン・ムンヂーに宛てゝ。

[1893年 明治26年 (サンギルケンより 64歳)]

『……Gegen die Dummheit kämpfen selbst Gotter vergebens. と云ふ言葉があるではないか！
モンシヨツトの著書も讀んだ。熱狂的だがトンドル氏の様な深遠な意味はない。……14日後にはウキンに歸つて學期の第2期をやつてのけやうと思ふてゐる。今度は最初インフルエンザの加答兒と不眠症とに不相變惱まされた。その上に拙者の漸次増悪する心臟衰弱は例によりて例の通りである。拙者は不意に心臟の奴が停止する事を希望してゐるのだがそんなつまらない事はまだ來ないだらう。……此の冬期には休暇願を出さうと思ふてゐる（若しもそれまで生きてゐたらだ！）。……』

134. 在ウキン、セーゲン教授夫人に宛てゝ。

[1893年 明治25年 (サンギルケンより 64歳)]

『……私のサンギルケン療養は大いに効果があるやうです。こんなに諸症狀が輕快するとは考へて居らなかつたのです。……拙者の學問的の仕事に就いては既になすべきものは爲し終つたのです。此の上の欲求は無理と云ふものです。能力消耗です。然し何か新らしい事でもする氣になれば博物學に就いての仕事ですが醫學の部分的の小さな仕事は弟子共が熱心にやつて

くれてゐますから私は唯だ一般的の事をやつてゐるだけです。……』

『……森が好きになりました。森々として天に沖する森を眺めてゐるのが花園に若木を植付けてその成長を楽しむより好きになりました。老人は兎角將來よりは過去の事に關心を持つものであります。……』

『……人間は自然の一片であります。そして自然には一定の法則があつて之によりて種々な變化が起つてくるものです。そして其の自然の最終の目的が抑も何であるかと考へるのは人智の及ばない事であります。だから此の世界を人間中心主義の立場から考へて置くより仕方がありません。そしてあのアルヒメデスの考へ方が實現出來るとしても矢張人間中心主義の立脚點になるだけです！……』

註。A.曰く「我に地球外の一點を與へよ。さらば地球をひつくり返して見せる。」結句人間と云ふものは So klug, wie zuvor! (ゲーテ、ファウスト第1篇中の文句)であるまいか！

135. 在ベルリン、フォン・シュメルリング夫人に宛てゝ。

[1894年 明治26年 (アバシアより 65歳)]

『……私の容體は依然たりであります。良くなるかと思へば悪くなる。快活になるかと思へば憂鬱になると云ふ始末であります。これが心臓病者の症狀なのです。だが私の心臓が不意に破裂してくれゝばよいかと希望する事もあります。唯だ長い病床生活だけは御免です。……』

樂岡子！ これは老人の常習言葉である。偉人でも平凡人でも同じ事である。そしてそれが人間 B. 老人の本音であるまいか。

136. 在ハイデルベルグ大學、チエルニー教授に宛てゝ。

[1894年 明治26年 (アバシアより 65歳)]

『……本年度からやつと拙者の外科教室の改築の着手が實現する運びになつたよ。だから若し拙者が生存して居られたら來年の秋(1895年)開校出來る都合なのだ。さうなれば1896年には退職する心算なのだ。だがこんな衰弱した心臓の持主ではそれまで生きて居られるか、否やだ。……』

樂岡子！ 多年の希望であつた病院改築の實現を夢見てウキンへは再び選つて來られるや否や神ならぬ B. は知る由もなく又アバシアへの療養に出掛けた時に最初の助手であつた C. に宛てゝの最後の手紙である。

137. 在アバシア、クラツクス教授に宛てゝ。

[1894年 明治26年 (アバシアより 65歳)]

『……若しもの事があれば在ウキンのドクトル、ゲルズニーに電報を打つ事を依頼して置く目下拙者の容體は格別悪くなつたと云ふのではないが不眠の夜が続くし午前の中に2時間程寢椅子によると脈搏不正と恐ろしい呼吸困難に襲はれるのでまたジキタリスの服用を始めたよ。別に之が爲めに君の來診にも及ぶまいと思ふ。之は拙者の常例なのだ。……』

138. 在ウキン, フォン・グリユベル教授に宛てゝ。

[1894年 明治26年 (アバシアより 65歳)]

『……貴下にまだ改築工事の命令が當局者より下つてこないと申さるゝか？これは驚いた！文部省Z分課では確かに着手してよいと云ふ許可があつた筈です。多分貴下が建築工事の主任になる事に反対者があるのかも知れない。我々には敵もありますぞ。話が進行しなければZ分課へ行つて談判して下さい。どうも事件が以前よりもつれて居るやうですが此の工事は拙者が退職する迄とても待てない事項なのですぞ。……』

樂岡子！悠々として静養してゐるアバシアへG.の一通の手紙が着いたので事の意外に怒氣冠を衝いた事であらう。そして確かにそれが爲めに不眠の幾夜と脈搏の不正と呼吸困難の幾月か續いた事であらうと思ふ。之を精神的ショックとも云へる。そして其の次の日附の書面がB.の絶筆となつてウキンに着いた。

139. 在ウキン, オフンデツテル教授に宛てゝ。

[1894年 明治26年 (アバシアより 65歳)]

註。之は死亡2週間前に書いた手紙である。

『……近頃ある晩に一度ホテルの廣間でチゴイネルの歌を聴いたが之れが爲めに別に拙者の諸症状が輕快したと云ふ譯ではない。不相變呼吸困難, 不眠症は思ふやうに治らないのは當然である。諸症一進一退である。……』

樂岡子！之がB.書簡集の最終の手紙である。その後2週にしてB.は鬼籍に登つた。果して如何なる終焉症状のもとに死んで行つたかは解らないし又其の2週間の間に手紙を書いたのか否やも解らないが特に不思議なのは壯年の時に戰場より妻に宛てた2, 3の書面はあるにしても晩年に於て自分の妻に宛てたる一片の手紙すら此B.書簡集にない事である！多分之は公にする事を避けた爲めであるまいかと思ふのはB.の如き筆まめな人物が妻に宛てた手紙を書かない筈はないと思ふ。B.の自序傳に如何なる事が書いてあるか一讀する事を得れば頗る面白い事柄が多いと思ふ。そして其の自序傳に左の文句が書いてあるとアルベルトはその追悼文に載せてゐる。

『自分に對する門弟の敬愛と自分の友人の親切を最後まで受け得られたものは幸福な人間であると云へる。』

左様！そして現代ではそんな人物も少ないし又そんな門弟も友人も少ないものであるだらう。御時勢であるまいか！

老ト庵も此の戲筆の最後にもつと駄筆を弄したかつたが止めとした。そして曰くだ

『凡そ人の傳記を書くよりは傳記を書かれる人にならなければならない。』

筆を投じて感あり。

1. Billroth 書簡集は全部で505通の書簡を蒐集したものである。其の中より僅かに106通だけの文書の中から人間 Billroth に關するものゝ一部を拔萃し之を譯し、またこれに愚筆を書き加へたものが即ちこれである。固より外科學發達史にはあまり関係も興味もなからうと思ふが人間 Billroth を考へるには好材料でない事はない。

2. 畑達ひの外科學の發達に關して老ト庵の批評と愚見の添筆は固より無用の業である。唯だ老ト庵は人間 Billroth を此書簡によりて知る事に重なる關心を持つた。もしそれ Billroth の外科學上の功績に就いて知らんと欲する人は Prof. Albert の書いた Nekrolog を讀むか又は B. 氏自序傳を讀めば解る事と思ふ。之は老ト庵の力の及ぶ事ではない。

3. Billroth の晩年に於ける事業と考察の煩悶は此の書簡集によりてその片鱗は知る事が出来る。B. が晩年に於て計畫した看護婦養成所の工事に少なからぬ私財を投じたり又其の夫人をして其の事務を専ら取扱はしめたのは事實らしいがその事項に就ての關係に於ては此の書簡集からは少しも知る事が出来ない。

4. 此の「Billroth の書簡集から」は、樂岡君には何等の興味も利益もなからうが老人ト庵は老人 Billroth を知るに及んで人間 Billroth を知る事を得た事に大なる興味を感じた次第である。

5. 書簡集には B. の好きな音樂の事が甚だ多く書いてあるが音樂を知らない老ト庵は一切之に就いて書かなかつた。否書けなかつた。

追 記

樂岡子！ト庵の「Billroth 書簡集から」は之で擲筆しましたがこんな無用の筆硯を弄した事の理由は「緒言」にも書きましたが其の中から Antiseptic と Aseptic の醫學用語とその外科學上の應用と又一般麻醉術のはじまりに就いてもう少し B. 氏の書簡集に書いてあるかと思ひましたが得る處が甚だ少なかつたのであります。何時頃如何なる書から書き抜いたか知りませんがト庵の Memo の中に左の記事がありました。即ち現代に於ては重に外科學上に Aseptisch とか Antiseptisch と云ふ言葉が八釜敷しく云はれてゐるが元來其の言葉は何時頃から醫者が云ひ出したものか？と調べて見るとそれは決して19世紀の人々の發明した言葉でなく既に18世紀の中期に此の文字が用ひられてゐた。そしてそれは醫學界だけでなく民間にも使用せられてゐた言葉であつたらしい。即ち1751年……昭和14年を溯る事188年前に發行されてゐた Gentle Magazin と云ふ雑誌に左の事が書いてある。曰く「ミレー (Myrthree) の水溶液は海水よりも12倍も強い Antiseptic の力がある」とあつた。但しミレー液とは如何なる溶液であつたかは不明である。又その時代の百科辭典様の書籍に アンチゼプチクの定義を左の通り書いてある。Antiseptica, sunt remedia interna et externa, Vuae putridini resistent. 即ち防腐と云

ふ意味を示してゐる。あの Semmelweiss の用ひてゐた防腐劑はクロールナトリウム即ち漂白粉であつた。それからリスターは多數の種々なる藥品を用ひてゐた。其の中にアルコール・リッリンもあつたさうである。

2. 日本に於ける最初のクロ、ホルム使用の事は矢田挿雲著の「江戸から東京へ」の巻六に下の記事がある。

『文久元年6月3日江戸吉原名代の幫間善考の子由次郎が脱疽に罹つた際に立朴(伊東)はクロ、ホルムを用ひて右脚を切断した。之我が國の醫者が麻酔藥を手術に應用せし始めてあつて経過頗る良好 由次郎は快癒の後以前の通り客席に出て 隻脚で舞つて喝采を博した。クロ、ホルムは其の少し前に 蘭醫 ボンペー が長崎へ來た時に輸入したものであるが劇藥であるから誰も手をつけなかつたのを立朴が卒先して使用の端を啓いたのである。そしてクロ、ホルムは切支丹の手品ではあるまいか、と一時は非常な評判であつた。』

樂岡子！ 之は素人の書いたクロ、ホルム渡來の物語であるから果して眞か否やは解らないが文久元年と云へば1861年に相當し シンプソン がクロ、ホルムを應用したのは1848年であるからそれから13年後の事であり 昭和14年を溯る事實に78年前の事であつた。そして之は江戸の事件であつて ボンペー はそれ以前に長崎に渡來してゐたのだから長崎に於ては此の魔酔藥は既に應用せられてゐたのであらうと思ふ。

附 記

ビルロート逸話

ビルロート は其書簡集に現はれてゐる様に感傷的なそして頗る眞面目な學究的人間であつたから面白い逸話としてはあまり多くは云ひ傳へられてはないが其2, 3を左に書き加へる。

其 一

ある時1人の老人が造鼻術の手術をやつてくれと頼んできた。B. が之れを診察するとなる程其人の鼻は半分欠損してゐる。しかし随分長年月の昔時からの欠損であるらしく、しかも白髪の老人であつた。そこでB. と病人との間に一問一答がはじまつた。

B. 『君！ なるほど君の鼻は半分欠損してゐる。だが、君は何歳だなア。』

病人『先生！ 今年丁度80歳になります。』

B. 『80歳？！ 随分高齢だなア、そして鼻が悪くなつてから何年になるかア。』

病人『50年以前からです。先生！』

B. 『それでは50年間その鼻で差支へがなかつたのなのに80歳になつて造鼻術にも及ぶまいではないか。』

病人『先生！ 實は私の父は110歳で歿しましたので私も今後30年もこんな鼻で辛抱するにも及ぶまいと考へましたので一つ先生の奇術で普通の鼻を造つて欲しいのですがなア。』

B. 『止めて置き給へ。君！ 50年も辛抱したのではないか！ 今後30年と云へば50年より少な

いぞ！ 俺は造鼻術の爲めには鼻はなぶりたくないよ！ 鼻の爲めの造鼻術ならいやだよ！』

世の中に病氣の爲めに手術する事は必要だが手術の爲めに病氣を持つてくる人も少なくな
い。

其 二

B. がある時ウキン醫學會で左の様な演説をして聴衆を笑はした事があつた。

『……腎臓摘出の 1 病例を報告しますがある 1 人の婦人が腎臓癌に罹つてゐるので其病人の親屬一同の承諾を得て 次の日に腎臓摘出の手術を施さうと思ひまして 器械萬般の準備をして其病人の邸宅へ出掛けました。然しこの困難な手術は全く失敗に終わりました。と云ふのは其病人は手術の前夜に人知れず首を吊つて死んでゐたからであります。……』

其 三

外科の臨床講義にある 1 人の 8 歳になる病人が運び出された。そしてある 1 人の受檢者がその病氣を診斷せなければならぬ場合であつた。處で頑是ない子供は 大聲を上げて泣いて仕様がな。それで B. は云ふた。

B. 『よい子だ、よい子だ。何にもしやしないよ！ 恐い事はない。よしよし、よい子だ、よい子だ。泣かずに、泣かずに！』

然るにその子供は泣いて止まない。そして涙を流して ポケットから 1 個の銀貨をつかみ出しながら B. に云ふた。

『……いやだよ、いやだよ！ をぢちやん！ 此銀貨をあげるから歸らしてください。なア、おぢちやん！ これをあげるよ。おぢちやん！』

滿堂哄笑！ 子供はますます泣き叫ぶと云ふ事になつて流石の B. も弱り果てゝ臨床講義も中止、試験も中止、そして子供の好意の銀貨も得ずに苦笑しながら講堂から送り出したと云ふ事があつた。